

太宰府の文化財

455

古代の大きな建物跡

水城小学校校舎の建替えに伴う発掘調査

―大宰府条坊跡第346次調査―

令和4年10月から12月にかけて、水城小学校の校舎改築に伴い発掘調査を行いました。調査地からは複数の掘立柱建物跡が見つかり、出土した土器より奈良時代から平安時代のものであることがわかりました。さらに建物跡の柱穴のいくつかには当

時の木製の柱が見つかりました。今回は一番大きな規模の「建物跡1」とその柱について紹介します。本調査で見つかった建物跡は確認できるもので5棟あります。そのほとんどが調査地の外へ続くもので、このうち建物跡1は調査地内に納ま



写真1 見つかった建物跡1



写真2 柱穴の状況

り確認することができました。その規模は東西3間(約6m)、南北7間(約16m)の南北に長く、20基の柱で構成されます。建物跡1の特徴は、ほかの建物跡の柱穴の幅が30cm〜40cmであることに比べて、一辺が約100cmと大きいことです。柱穴のうち4基には当時使われていた柱材がそのまま残っていました。写真2は柱をどのように建てていたのかを観察するために、柱穴を半分に掘ったものです。柱材の上の部分は腐って無くなっていました。残存高は約45cm、直径は約30cmを測ります。柱材の側面を見てみると、縦方向に筋のようなものが何本も見えます。これは伐採した木を柱材にするために工具で削った痕です。ほかの柱材にも同じ工具痕が観察できました。柱材はどれも直径がおよそ30cmに近いことから、大きさを揃えて使用していたものと考えられます。また、柱穴の底部には柱材を固定するために石や瓦を詰めているものが見られ、重い柱がしっかりと建つように工夫された地下の様子が確認できました。

さて、この大きな建物の性格です

が、まだ具体的なことはわかっていません。しかし、性格を考えるヒントとして出土遺物があります。今回の調査では文字のある紙片に漆が付着して残された文書と文字が書かれた木屑(木簡片)が見つかったこと、や、文字を書く上で重要な硯が見つかっています。当時、文字は役人など限られた人が使用していたことから、古代の九州を管轄する大宰府や筑前国を管理した国府などの役所であったことが考えられます。また、古代の軍団に関わる銅印(遠賀団印)が明治32(1899)年に校内での工事作業中に見つかったことから、軍事組織に関わる建物の可能性も考えられそうです。また、推測の域を超えませんが、建物跡1はこれらに係る重要な建物であったと言えるでしょう。

調査は無事に終了し現在、水城小学校では校舎の建設が進められています。来年には完成し、この場所が多くの児童の学び舎となることでしょう。

文化財課

中村 茂央

